

平将門の挫折

1、平将門の新皇即位式

平将門は、平氏の姓を授けられた高望王（たかもちおう）の三男平良将の子である。高望王は桓武平氏の祖であるので少し説明しておこう。高望王は、桓武天皇の孫であるが、寛平元年（889年）、宇多天皇の勅命により平朝臣を賜与され臣籍降下し平高望を名乗った。そして、高望はその9年後に上総介に任じられる。当時の上級国司は任地に赴かない人が多かったが、高望王は、長男国香、次男良兼、三男良将を伴って任地に赴いた。高望親子は任期が過ぎても帰京せず、国香は前常陸大掾の源護の娘を、良将は下総国相馬郡の犬養春枝の娘を妻とするなど、在地勢力との関係を深め常陸国・下総国・上総国の未墾地を開発、自らが開発者となり生産者となることによって勢力を拡大、その権利を守るべく武士団を形成して、その後の関東における桓武平氏の基盤を固めた。関東における桓武平氏とは、千葉氏・上総氏・三浦氏・土肥氏・秩父氏・大庭氏・梶原氏・長尾氏のいわゆる坂東八平氏をいう。

しかし高望王は、その後延喜2年（902年）に、西海道の国司となり大宰府に居住、延喜11年（911年）に同地で没する。なお、着任早々の翌年には、彼の上司である太宰府の長官・菅原道真も同地で没しているが、ほぼ1年間は菅原道真と接して、菅原道真の恩顧を受けたものと思われる。平将門の父・良将は太宰府には付いて行っていないが、当然便りはあつたろうし、孫の将門も菅原道真の人柄などは父から聞かされていたのではなかろうか。これは全く私の想像だが、将門にとって菅原道真は子供の頃から尊敬すべき人物であつたのではなかろうか。私はそう思う。

以上の通り、平将門は桓武天皇の5世である。そういう平将門は、本来、朝廷側の人間であるが、下総国、常陸国に広がった平氏一族の抗争から、やがては関東諸国を巻き込む争いへと進み、その際に国衙（こくが）を襲撃して印鑰（いんやく）を奪い、京都の朝廷（朱雀天皇）に対抗して「新皇」を自称するのである。よほどの事情があつたに違いない。平将門は、東国の独立を標榜したことによって、遂には朝敵となる歴史上得意な人物である。

本来朝廷側の人間である平将門が京都の朝廷（朱雀天皇）に対抗して「新皇」を自称した。それにはよほどの思いがあつた。そのことについては、大分前のことになるが、NHKテレビ放送の「そのとき歴史は動いた！」で「平将門の乱」が取り上げられ、その番組で詳しく説明されている。それが現在YouTubeで見られるので、それを紹介しておこう。なぜ平将門が東北独立王国の樹立を目指したのか、その辺の事情がよくわかる。とても良い番組であると思う。

<http://www.youtube.com/watch?v=b0lGmPRiEm0>

<http://www.youtube.com/watch?v=4KBPh8cZQb8>

http://www.youtube.com/watch?v=V1_SM9YsI48

<http://www.youtube.com/watch?v=8Zb7tDkxmcU>

さて、平将門は、驚くべきやり方で「親王就任式」をやっている。上の番組では、巫女の託宣による権威づけを強調しているが、それもあるにはあるが、それ以上に私が驚くべきやり方というのは二つある。「親王就任式」の権威付けに、一つは八幡大菩薩を持ち出していることと、もう一つは菅原道真の怨霊を持ち出していることである。実に驚くべき知恵である。まず、「将門記」によって「親王就任式」の様子を見ることにしよう。。義江彰夫の「神仏習合」（1996年7月、岩波書店）からの抜粋である。

「将門記」では、「関東諸国府を軍事制圧した将門は、939年12月、上野（こうずけ）国府に進駐して新皇即位の儀式を行なうにいたった」と述べ、そのありさまを次のように伝える。すなわち、

『 将門は、府を領して庁に入り、四門の陣を固め、かつ諸国の除目（じもく）を放つ。時に、一晶伎（かんなぎ）ありて、云えらく、八幡大菩薩の使いと口走る。朕（ちん）が位を蔭子（おんし）平将門に授け奉る。その位記（いき）は、左大臣正二位菅原朝臣（あそん）の靈魂表すらく、右八幡大菩薩、八万の軍を起こして、朕が位を授け奉らん。今すべからく三十二相の音楽をもて、はやくこれを迎え奉るべしといえり。ここに将門、頂きに捧げて再拝す。いわんや四の陣を挙りて立ちて歡び、数千しかしながら伏し拝す。……ここに自ら製して諡号（いみな）を奉す。将門を名づけて新皇という。』……と。

この「将門記」に記された儀式のありさまは、実に、驚くべき内容に満ちている。「新皇」即位という破天荒な儀式が巫女によって演出されたというだけでなく、即位を正当化するものとして、八幡大菩薩と菅原道真が登場しているからだ。

それでは、以下において、逐次、なぜ驚くべきでないようなのか、そのことについて説明をして行きたい。

平将門の挫折

2、坂東武士の期待

八幡大菩薩はもと北九州宇佐地方の土着信仰神。奈良時代に武力で国家を外敵から護る神に高められ、平安時代初期の九世紀半ばには王城鎮護の神として石清水（いわしみず）宮に勧請され、十世紀初めまでには応神天皇以下三神と認識されるようになった神である。だが、ここで注意しなければならないのはその称号である。菩薩とはもともと悟りをひらくまえの釈迦のことをいい、のちに大乘仏教で悟りを求めて修行する人を称している。すなわち、八幡大菩薩とは、菩薩のかたちをした八幡神という神なのだ。その八幡大菩薩がなぜ関東武士団の心を掴んだのか？ そのことを理解するために、まず中沢新一の考えを紹介しておきたい。

中沢新一によれば、関東武士団の縄文時代から受け継いだ特質として、「野生の思考」があるという。中沢新一は、河合隼雄との対談集「仏教が好き！」（2003年8月30日、朝日新聞社）で次のように述べている。すなわち、

『 東日本、岐阜あたりから東のほうは、もともと縄文文化圏ですから狩猟地帯なんです。また、アイヌの人たちを見てもわかるように、入れ墨をする。ですから入れ墨をしたり、狩猟したりしている人たちの文化伝統の地域が、東日本に広がっていた。ところが都を中心にして発達した神道は流血を嫌いますし、女性の血なんかも不浄だと恐れる。神道は清浄をもとめて、仏教は殺生禁断です。いずれにしても、東国の人たちの生き方、縄文的生き方にはそぐわないところがある。

ところが東日本では諏訪神社が「動物を殺してもいい」という御札を配っていたんです。狩人たちはそれを持って、狩りに出かけていった。関西では、春日大社なんかを見てもわかりますように、鹿をいっぱい飼いますでしょう。そして殺さない。ところが諏訪大社の場合は、鹿はいっぱいいるんですが、これは大量に殺してサクリファイズします。供犠をする儀式をする。神社毎年数十頭もの鹿の首をはねて、それを」神前に並べる儀式を、明治になるまでずっとつづけていました。 』

『 関東武士は関西武士と、背景となる世界がまったく違っていました。そういう人たちが西の文化とぶつかったとき、彼等の生き方は否定されてしまう。』・・・と。

そうだ。中沢新一の言う通りだ。「野生の思考」だ。何故八幡大菩薩が関東武士団の心を掴んだか。それは東国には、「東北」がもっとも濃厚だが、当時はまだ東国にも「野生の思考」が残っていたからである。問題を解く鍵は「野生の思考」だ。何故八幡大菩薩が関東武士団の心を掴んだか。それは・・・東国には、当時はまだ「野生の思考」が残っていたからである。かくして関東武士団によって八幡神は全国に広がっていく。ところで、この・・・全国的にもっとも数の多い八幡神社は、先に述べたように本来は秦（はた）氏の氏神であった神が昇格したものである。

さて、次の問題は、その八幡大菩薩がどういう風に誕生したのか、という問題である。

日本書紀ができるのが720年であるが、まあいうなればそのころ、藤原不比等（ふひと）が律令国家を支える基盤として中臣（なかとみ）神道を完成していく。これに危機感を持ったのが秦（はた）氏ではなかったか。秦（はた）氏がおそらく法蓮（ほうれん）に働きかけたのであろう。法蓮（ほうれん）は、すでに九州は英彦山で山岳仏教を修得すべく修行中であつたようだが、おそらく秦（はた）氏の意向にしたがって、宇佐の地で弥勒寺を創建、のちにその弥勒寺を宇佐八幡宮の境内に移す。

中央集権的な律令国家が進みそうだ。もちろん、秦（はた）氏にも八幡（やはた）という氏神がある。それが律令国家と中臣（なかとみ）神道という・・・新しい国家システムに飲み込まれてしまいそうだ。宇佐の神も応神天皇と神皇皇后という母子神に摺り替えられてしまった。藤原不比等（ふひと）の進める中臣（なかとみ）神道に飲み込まれるのではないか。そういう危機感から、弥勒寺の八幡宮への移設が実行されたのである。

かくして、八幡大菩薩が九州は宇佐の地に誕生するのだが、そののち、八幡大菩薩は和氣清麻呂らの力によって山城の国は男山の石清水（いわしみず）寺のあとに勧請される。その前に東大寺の境内に手向山八幡宮が建立されるが、男山すなわち石清水（いわしみず）への勧請はいうなれば八幡大菩薩の本格的な中央進出である。そのあと誉田（こんだ）八幡（現大阪府羽曳野市）などもできる。そして、次第次第に・・・関東武士団の心を掴んでいくのである。実は、その際に、忘れてならないのは、秦氏の東北における影響力である。

秦一族は、特に東北地方の発展に大きな力を発揮していくが、このことを理解するには、物部氏のことをまず理解しておかねばならない。秦一族は、物部守屋が蘇我蝦夷と入鹿に殺されてしまったから、物部一族の統括していた技術者集団を引き継いでいくのである。

谷川健一は「四天王寺の鷹」の中で、物部氏のことについて、日本の歴史を考える上で非常に参考になる事柄をいくつか記述したが、その中で物部氏の東北における勢力について

も重要な指摘をしている。それを以下に紹介しておきたい。彼は、こう述べている。すなわち、

『 日本各地の守屋姓を名乗るもので、守屋の子孫と称するものは少なくない。諏訪大社の洩矢神（守矢神）も守屋の子孫だという説がある。』

『 物部一族の残党と名乗る人びとが東北北端の地に、かつての先祖の栄光を忘れずに生きていた。』・・・と。

なお、以上の事柄については、かつて私の書いた文書を要約したものである。この際、より詳しくご理解いただくために、その原本というかかつて私の書いた文書を、この際、紹介しておきたい。興味のある方は、是非、ご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/masasoku.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/8tanjyou.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai08.pdf>

平将門の挫折

3、朝廷の大戦略

「北の天神縁起」などによると、菅原道真が死んで幾月も経たないある夏の夜、道真の霊魂が比叡山の僧坊に現れて、尊意（そんい。道真が仏教を学んだ師）にこれから都に出没し、怨みを復讐ではらす決意を述べ、邪魔をしないようお願いをしたのだそうだ。その後、道真の怨霊は暴れまくることになる。

その後数年経った908年10月7日、道真配流の首謀者のひとり藤原菅根（すがね）が54才でなくなったが、都では道真の怨霊の祟りだという噂が流れたが、翌年、道真の怨霊はいよいよ核心に迫っていく。

その詳細については、既に「[天神信仰](#)」で述べたように、時平の命を奪った道真の霊は、その後ますます激しさを加え、時平の子孫たちを次々と死に追いやり、遂に923年、醍醐天皇の皇太子の命まで奪うに至る。そして930年6月26日には、清涼殿（せいりょうでん）に落雷が起こった。これが凄かったようだ。昼すぎの頃、愛宕山の上より起こった黒雲はたちまち雨を降らせ、にわかには雷鳴を轟かして清涼殿の上に雷を落とし、神火を放った。

この結果、殿上の間に侍していた大納言藤原清貫は胸を焼かれて死亡し、右中弁平希世（まれよ）の顔は焼けた。また紫宸殿（ししんでん）にいた者のうち、右兵衛佐美努忠包（みぬのただかね）は髪が焼けて死亡、紀陰連（きのかげつら）は腹部が焼けた。そして、この落雷で、天皇も病に伏し起きれなくなったしまった。おそろしや！おそろしや！

理不尽な処置で人を死に追いやれば、その怨霊はその罪を犯した人すべてに報復を加え、ついには最高責任者たる天皇をも殺しかねないのだという認識が当時の人々の間にすっかり定着してしまった。

日本の国家というものが誕生して以来、天皇を中心とした統治形態が危機に直面した時、それは天皇そのものが危機に直面したということだが、そういう時というのは、菅原道真の怨霊が猛威を振るった時しかない。しかも、平将門が菅原道真の威を借りて、本気で天皇にとって変わろうとしたのだ。これはまさに朝廷（朱雀天皇）の危機である。おそらく、平将門が蜂起した時、全国の豪族に動揺が走ったと思う。豪族たちの精神状態としては、菅原道真の怨霊が平将門に味方しているとすれば、この際平将門の陣営に入った方が良くはないか。いやいや、やはり朝廷に刃向かうわけにはいかないのではないか。そういう動揺である。この動揺を鎮めたのが浄蔵である。

日本の国の形、「国体」というものは、天皇の権威と政治の権力の複合形態である。この認識がもっと国民の間に浸透していけば、西洋型民主主義とは一味違う日本型民主主義が成熟していく、と佐伯啓司は言っている。私もまったく同感であり、この「正義の偽装」というシリーズは、そういう日本型民主主義で本来持っている民主主義の大欠陥を補っていかうという思想の下で書いている。したがって、日本の場合、天皇は絶対になくなくてはならない存在だ。その天皇という存在そのものが危機に陥った時が、日本の歴史上二度ある。一度目は平将門の乱の時であり、二度目はこのたびの終戦の時だ。天皇の戦争責任についてはいろいろな意見がある。私は、すでに書いているように、この度の戦争は、軍部の暴走とそれを許した枢密院によって引き起こされたものであり、天皇に戦争責任はないと考えている。しかし、マッカーサーに真実を見抜く能力がなかったら、日本の天皇制は終戦時になくなっていたかもしれない。また、戦後の日本を統治するのに天皇の存在というものが必要だったということもあるだろう。しかし、平将門の場合はまったくその逆で、平将門は天皇を敵として戦ったのである。このように考えていくと、我が国の世界に誇るべき天皇制の最大の危機は、平将門の乱の時に生じていたとご理解いただけるだろう。その天皇制最大の危機は、浄蔵によって回避された。そういう意味で、浄蔵は、歴史上もっとも輝かしい貢献をした人物である。

朝廷は、平将門をやっつけた人物は貴族に取り立てるという前代未聞の秘策を出して、平将門をつぶそうとする。先に紹介したNHKの番組ではそのことを強調しているが、そういう貴族取り立ての秘策も効果を発揮したかもしれないが、問題は、もっと基本的に、地方豪族の動揺をどのようにして鎮めるかであった筈である。全国規模で、特に東日本全体という広い範囲で、地方豪族が平将門陣営に付く恐れが多分にあったのである。私は、上述したように、平将門が蜂起した時、全国の豪族に動揺が走ったと思う。豪族たちの精神状態としては、菅原道真の怨霊が平将門に味方しているとすれば、この際平将門の陣営に入った方が良いのではないか。いやいや、やはり朝廷に刃向かうわけにはいかないのではないか。そういう動揺である。もちろん、朝廷は、全国の寺社に将門調伏の祈祷を命令する。しかし、当時、怨霊や生霊にたいする秀でた呪力を持っていたのは天台密教の浄蔵であった。私は、朝廷の浄蔵に対する期待は非常に大きかったと思う。浄蔵は比叡山の延暦寺にこもり必死で将門調伏の祈祷を行うのである。将門の生き霊は四明岳（しめいがだけ）の将門岩に押し込められ、将門の勢いは急速に衰えていく。浄蔵が大威徳法（だいいとくほう）という祈祷を行なう間、弓箭を帯した将門が、燈明のところに現われて、神の放った鏑の音が檀中に鳴り渡ったと言われている。浄蔵は比叡山にいながら、将門の降伏を悟るのであった。この浄蔵がいた比叡の四明ヶ岳には、将門岩と呼ばれる岩がある。

平将門と藤原純友が、平安京を見渡しながら、謀反の密談を交わした所だと京都ではささやかれている。そのことについては、かつて私の書いたホームページがあるので、それをここに紹介しておこう。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/kadoiwa.html>

平将門の挫折

4、後日談



平将門の首は、平安京へ運ばれ、京都の七条河原にさらされた。何ヶ月たっても腐らず、眼を見開き、歯ぎしりしているようだったという。その将門の形相を見た歌人 藤六左近が歌を詠むと、将門の首が笑いだし、突然地面がうごめき、稲妻の中、『我に四肢を与えよ。もう一戦せん』と叫び、夜な夜なその声が響く。そして、ある夜、将門の首は体を求め、坂東を目指して飛んでいったという。

そのように一般にはささやかれているが、実際のところはどうであったのであろうか。加茂川の河原で梟首（きゅうしゅ）にされたのは事実であったようだ。梟首とはさらし首のことだが、早馬でもってきても腐敗がすすんで・・・きっとすさまじい顔であったに違いない。

実は、加茂川の河原に梟首（きゅうしゅ）される前に、将門の首は、いつとき四条烏丸付近で留め置かれたようで、そこでは空也が小さな祠をたて念仏供養が行われた。今なおずっと念仏供養が行われている。空也念仏である。そのお陰であろうか、京都では、将門の怨霊は鎮まっている。大手町の首塚には将門の霊をお祭してあるけれど、いろいろ不吉な話があつて、将門の怨霊は鎮まったとは言いがたいようだ。大手町の首塚には熱心な信者のお参りや奉仕が絶えないが、なんせビルの谷間の狭苦しい空間である。狭いながらも清しい聖地で私の特に好きなところであるが、将門は必ずしも気持ちがあはれないのではなかろうか。ビルを壊す訳にはいかないのです、お祭りを少しでも数多くやるしかないが、お祭りの数がちょっと少ないようだ。首塚に礼を失しないようにし、きちっと霊をお祭していかないといけないのではないかと。事実、今も怨霊の祟りがあるようである。おそろしや、おそろしや！

靖国神社の近くに築土神社という小さな神社がある。現在は誠に小さな神社ではあるけれど、[本来は由緒正しき神社である](#)。築土神社は、天慶3年(940年)、京都にさらされた平将門公の首を誰かが首桶に納め密かに持ち去り、これを現在大手町にある首塚の近くに祀ったのが始まりであるといわれている。現在大手町にある首塚は、築土神社が大手町から他の場所に移設されてから作られたものらしい。

神田明神の三の宮にも平将門がお祀りしてあるが、神田明神のホームページにあるように、神田明神に平将門を祀るようになったのはずっと後のことである。神田明神のホームページには、『天慶の乱で活躍された平将門公を葬った墳墓（将門塚）周辺で天変地異が頻発し、それが将門公の御神威として人々を恐れさせたため、時宗の遊行僧・真教上人が手厚く御霊をお慰めして、さらに延慶2年（1309）当社に奉祀いたしました。』[・・・と書かれている](#)。

話を京都に戻そう。先ほども申し上げたように、当時「市聖」とあがめられていた高僧の空也上人は京の都において、将門の首が加茂川の河原に晒される前にいったん留め置かれた地に堂を建て手厚く供養した。そのことからその地はいつしか「空也供養の道場」と呼ばれるようになり、後にこれが「クウヤクヨウ」がなまって「コウヤク」、細い路地に位置することから「膏薬の辻子（こうやくのずし）」として地名になったと伝わっている。私がお参りしたときは、全く小さな祠があるだけで、ほかには全く何もなかった。



しかし、現在は、神田神宮も神田明神と名を改め、京都将門塚保存会もでき、将門の御霊（みたま）が手厚く祀られている。以下に、詳しく紹介するが、とても良いところであるので、皆さんもぜひ出かけてもらいたい。

場所は京都市下京区綾小路通西洞院東入新釜座町728である。この地図では神田神宮となっているが、現在は、京都神田明神である。





では、京都神田明神のホームページをご紹介申し上げます。

<http://blogs.yahoo.co.jp/sunnyback2sd/10772000.html?from=relatedCat>

このホームページにも出てくるが、京都神田明神では、平将門について次のように説明している。

平将門公（たいらのまさかどこう）

武士の先駆者「兵」として古代に東国を治めた人物。下総国（茨城県）に生まれ、長じて上京し時の左大臣・藤原忠平に仕えました。重要文化財「将門記」によると、将門公は従四位下で鎮守将軍の父・良将の死により東国に戻りましたが、叔父・平良兼との不和を機に叔父たちと反目するようになり、次々と戦いを仕掛けられその度ごとに勝ち続けました。将門公は騎射に優れ合戦の故実に通じ名誉を重んじる「兵の道」に生きたお方でした。苦境にも挫けず戦い、その一方で頼られると誰であろうと助け、たとえ敵であろうとも女性には優しく接するという「弱気を助け、強気を挫く」義侠心にあふれる人物でした。天慶二年（939）、常陸国の国庁に在地豪族の免罪を申し入れ和談による平和的解決を試みましたが受け入れられず、やむなく合戦となり国府を陥れました。以降、下野、上野、武蔵、相模などの国庁を手中に収め、さらに八幡大神と菅原道真公の霊より東国を治める「新皇」の称号を受けました。これ以降、将門公は謀反人とされ国家への反乱とされました。朝廷は将門公の反乱に恐れおののき、諸社寺に調伏祈祷を命じ、藤原秀郷と将

門公の親戚・平貞盛を追捕凶賊使に任命し東国へ派遣しました。そして天慶三年二月十四日、下総国における秀郷・貞盛軍との壮絶な戦いの末、将門公は神の鎬矢にあたり志半ばで息絶えました。将門公の首級は京へ送られこの地で晒された後、所縁の者が東国へ持ち帰り葬り将門塚を築かれ、延慶二年（1309）には東京・神田明神へ合祀されました。

京都将門塚保存会

この説明文は簡単明瞭で実に良くできてはいるが、少し補足説明をしておきたい。

先に、「平将門の挫折 2、坂東武士の期待」の所で説明したように、平将門の新皇即位式に登場する八幡大菩薩は、ご承知のように源氏の守護神であるが、その八幡大菩薩が坂東武士の心を掴んで行くのである。私は、八幡大菩薩のご加護がなければ、源頼朝の鎌倉幕府創設はなかったと考えている。しかし、源頼朝は坂東武士の心を十分理解していたとは言えないようだ。平清盛も貴族に対する憧（あこが）れがあったけれど、源頼朝も自分の娘・[太姫](#)を天皇に嫁がせようと画策するなど、貴族に対する憧（あこが）れがあったようだ。この佐伯啓思の「正義の偽装」について書いているこの一連のシリーズでは、天皇の権威と政治の権力とは分離されるべきであるという思想に立っている。歴史は紆余曲折をしながら、現在の理想的な「象徴天皇」を私たちは戴いているのだが、その象徴天皇を生み出したのは北条泰時である。したがって、私の考えでは、「坂東武士の期待」は平将門が最初にそれを受け、北条泰時がそれを実現したのである。

その点については、私の電子書籍 (http://honto.jp/ebook/pd_25231956.html) の「怨霊と祈り」の第4章で、『北条泰時は、御成敗式目をつくった。これは、完全な武士社会を作ったことになる。天皇を象徴天皇にまつりあげてしまったのだ。歴史は、武家社会を作りその仕上げのために北条泰時を登場さすのではないか、それが私の考えである。それはこういうことだ。平将門の思いとその後の関東武士の平将門に寄せる思いを重ねあわせて考えると、関東武士の気質は、あくまでも武士魂であって貴族趣味ではない。それが大きな歴史の流れであるように感ぜられる。権力は武士が持つ。天皇と貴族は、権力でなく権威を持って！それが関東武士の思いではないのか。それは大きな歴史の流れであると思う。』・・・と書いたが、平将門の乱は、日本の理想的な統治形態を生み出すきっかけになったのであり、平将門を逆賊だという謂れはない。

平将門の乱は、義のための戦いであったのである。それは貴族どもの腐敗に対する戦いであり、政治という権力と天皇の権威とを分離する戦いでもあったのだ。腐敗しきった貴族どもの政治の権力によって、首を切られ梟首（きゅうしゅ）にされた平将門の怒りは当然の怒りである。そのことは私たちは十分理解しておかなければならない。京都将門塚保存会の人々に敬意と感謝の念を申し上げながら、今こそ平将門に対する歴史的評価を正さなければならぬと思う次第である。

では、最後に、平将門に対する崇敬の念を抱きながら、平将門をお祀りしてある東京は神田明神の祭り「神田祭り」の様子をご紹介します。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/kandama1.html>